

## キと力をつけてきたアセアン(東南アジア諸国連合)

—クアラルンプールで考える—

開倫塾

塾長 林明夫

**Q：クアラルンプールへは何をするために行ったのですか。**

A：(林明夫：以下省略)マレーシアの首都、クアラルンプールに行ったのは、2012年10月22日から24日まで開催された、第38回日本アセアン経営者会議に日本からの参加者(41名)の一人として参加するためでした。アセアンからは83名が参加しました。

1973年に日本とアセアンの対話が始まってから来年で40周年を迎え、また、マレーシアのマハティール元首相が東方政策(ルック・イースト・ポリシー)を1982年に示してから今年は30周年になりますので、日本への関心は大きかったように感じられます。

**Q：マハティール元首相の東方政策(ルック・イースト・ポリシー)とは何ですか。**

A：マレーシアから見て東の方にある国、日本を見習って、国の発展、とりわけ貧困からの脱却、経済の成長を考えようという国家の基本戦略です。

今回の会議にマレーシア政府からはヤシン副首相とマハティール国際貿易産業副大臣が参加しました。マハティール副大臣はマハティール元首相の御子息で、上智大学に留学後、東京銀行に入行し国際ビジネスマンとしての経験を日本で積まれました。マハティール元首相は自らの御子息を日本に留学・就職させたことで、ルック・イースト、日本への熱い思いを示されました。

**Q：アセアンの国々の経済はよいのですか。**

A：直近2011年度の1人当たり国内総生産(GDP)を見ればよくわかります。シンガポールは49270ドル(世界12位)、ブルネイは38534ドル(16位)、マレーシアは10084ドル(64位)、タイは5394ドル(91位)、インドネシアは3511ドル(110位)、フィリピンは2344ドル(124位)、ベトナムは1374ドル(141位)、ラオスは1320ドル(143位)、カンボジアは853ドル(154位)、ミャンマーは824ドル(157位)と、IMFの2012年10月の調査ではなっています。

カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムの4か国はここ数年 CLMV と呼ばれ、急激な経済発展が期待されています。

今回訪問したマレーシアも急激に力をつけ、1人当たりGDPが1万ドルを超えました。2012年7月の失業率は3.1%、2012年第1四半期のGDPの伸びは5.4%と経済も堅調なようです。

**Q：なぜマレーシアはじめアセアンの国々は経済が上向きなのでしょう。**

A：それは、アセアンの国々が国情の違いを乗り越えて地域の連携を進め、経済成長、社会・文化の発展、政治・経済の安定、アセアン諸国間の課題解決を目的にアセアンを設立したからだとは私と考えます。

アセアンにはインドネシアのように人口が2億3千万人と1億人を超す国もありますが、ほかの9か国の人口は1億人未満と少なく、ブルネイ、シンガポール、ラオスと14万人未満の国々もあります。人口、国土の広さ、民族・言語、政治体制、経済体制の異なる国々がアセアンを構成しています。

EU(欧州連合)のように通貨統合や政治のゆるやかな統合の実現には至っていませんが、アセアン域内の経済連携は極めてさかんで一体化しつつあります。

**Q：アセアン諸国の日本への期待は大きいのですか。**

A：日本アセアン経営者会議の日本でのカウンターパート、相手方は東京の経済同友会でありますので、私も一会員として、10年前からほぼ毎年この会議に参加させていただいております。最近では、顔見知りの参加者も少しずつ増え、本音の議論をすることができますが、日本への期待は大きい、それも極めて大きいと年ごとに実感しています。

1人あたりGDPで、シンガポールは日本(年45869ドル、世界17位)を抜きました。また、日本は経済が20年以上低迷しています。にもかかわらず、アセアンの国々は日本をお手本とするルック・イーストの考えを変えてはいません。

日本が1日も早くGDPの2倍以上の国や地方の負債を返済し、デフレと少子化問題を克服した上で、以前のような力強い国になることを望んでいます。

マハティール元首相の御子息のように、日本に留学したい学生・留学させたがっている保護者はアセアンに山ほどいます。

日本に旅行したい、日本人と取引をしたい、日本で仕事をしたい、日本に住みたいというアセアンの人々も山ほどいます。

この日本の閉塞感を打破するために、日本はもっとアセアンの国々に国を開くべきだと私は確信します。

EU やアセアン、NAFTA をはじめ多くの国や地域が人ともとの資金の連携を進めている中、日本のように自分の国の人々だけで国家を完結させようと考え、外国人や外国企業を拒む国は非常に珍しいと考えます。

**Q：学習塾・予備校・私立学校の経営者や経営幹部の皆様には訴えたいことは何ですか。**

A：今回の会議の大半は英語で行われました。アセアンからの発言はすべて英語、日本側からの発言のほとんども英語で行われました。休み時間や会食時のアセアンの参加者との会話もすべて英語でした。

欧米の国際会議では当たり前の英語でのコミュニケーションの現象が、日本のビジネスマンが数多く参加する会議でもようやく見られるようになりました。

世界は急激に変化し、英語なしではコミュニケーションが成り立たなくなってきました。学校の英語を基礎としつつも相当本格的な英語でのコミュニケーション能力が求められる時代に入ったと言えます。

オリンピックでは、日本の高校生・大学生・20代が大活躍しました。世界の高校生・大学生・20代の

人々の英語のコミュニケーション能力は、同世代の日本人の10倍以上であることが多いようです。どうか御遠慮なく本格的な英語を目いっぱい教えていただきたく希望します。

**Q：最後に一言どうぞ。**

A：今月は、私の尊敬する梶田叡一(かじたえいいち)先生の本を2冊御紹介させていただきます。1冊目は「〈自己〉を育てる 一真の主体性の確立一」子どもの発達と教育2、金子書房、1996年5月30日刊。2冊目は「教師力再興一優れた教師に満ち満ちた学校に一」教育改革選書No.2、明治図書2010年6月刊です。梶田先生の「教育評価」有斐閣双書、2010年9月刊や、ドミニク・ライチェン、ローラ・サニガル先生著、立田慶裕先生監訳「キー・コンピテンシーズ一国際標準の学力をめざして一」明石書店、2006年5月刊とともに、是非御熟読下さい。学力とは何か、学力をどのように身に付けたらよいかを考えるとときに参考になりました。

— 2012年10月29日林明夫記—